
二人の副官

山内 詠

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二人の副官

【Nコード】

N1239T

【作者名】

山内 詠

【あらすじ】

職務を全うしたくてもさせてくれない中佐に、軍曹は戸惑うばかり……。とある軍隊に所属する中佐とその副官である軍曹の物語。逃げる男に追う女。逃げる男続編です。

（前書き）

なんだか好評だったので続きます。またも雰囲気のみのお話です。でもなんだかおかしな方向に転がった気がしなくもありません。

朝食のプレートを前にタリヤはため息をつく。

今朝のメニューはチーズトーストにジャーマンポテト、グリーンサラダ、コンソメスープだ。

チーズトーストもジャーマンポテトも好物だから、いつもならうきうきと食べられるのに、今朝はちっとも進まない。

「ねえねえ、ヴァル中佐との初めては上手くいったの？」

がちやがちやと派手な音をたててタリヤと同じテーブルにつくと同じ時に堪え切れないとばかりに問いかけてきたのはリーナ伍長である。タリヤと同じ時期に同じ基地へ同じ副官という立場で配属になったために研修など全と一緒に。それが縁ですでに打ち解けた仲であり、部屋は隣同士だし食事なども時間を合わせていつも一緒に摂っていた。

リーナの魅力は何といっても見事なハニーブอนด์であろう。真っ白な肌に薔薇色の頬、澄んだ青い瞳にいつも笑みが浮かんだ艶やかな唇。そしてとどめは大きくてマシユマロのように柔らかいその胸。軍服の胸元がきちんと閉まらなくらいのボリウムがあるために、式典などが無ければ襟はいつも開いたままだ。男性向けのグラビア雑誌から抜け出てきたようなその姿は、周囲の兵士たちの視線をいつも釘付けにしている。

一緒にいる時タリヤは痛いくらいに視線を感じているのというのに、リーナはいつもけろりとしている。さらに彼女は笑ってギャラリに投げキッスできるくらいの茶目っ気まで備えていた。

しかしタリヤは気づいていない。向けられている視線の半分は確か

にリーナのたわわな胸に注がれていたけれど、もう半分はむつちりとしたタリヤのお尻に向けられていることに。いつもリーナと一緒にいるがゆえにタリヤは自分に向けられている視線に無頓着であった。

昨夜タリヤが念入りにシャワーを使っていたのをリーナは知っていた。正式に副官として配属されて1週間、本当なら少々遅いくらいなんだから。

「ん……そうね」

タリヤは言い淀んだ。進んでいなかった食事の手が、ついに止まる。上手くはいかなかった。

冷たく向けられた背に縋りついて懇願しても、ヴァル中佐はタリヤを拒否したのだ。

「君にそういった類のことを求める気はない」と……。

詳しくは言わなくてもリーナは察してくれたようだ。

笑みが浮かんでいた顔がとたんに心配そうにしかめられる。

「ヴァル中佐……もしかして勃たかったとか!？」

こんなに可愛いタリヤに勃たないなんてありえないわ！でもそれしか理由は思いつかない！とリーナが頬を膨らませると、タリヤは首を横に振りながら答えた。

「うっん、すごくおつきなつてた」

プレートの上に盛られたジャガイモをフォークでいじりながらタリヤは思いだす。

硬い軍服の布地を押し上げていた存在はしっかり確認した。そこに手を伸ばしたかったけれど、頑なな拒否の姿勢に負けてしまったのである。

「はあ！？　じゃあなんでダメなの！？」

「わかんないの。ただ、そんなつもりはないって言われちゃった」

本当に！？　信じられない！　なんで！？　とひとしきり騒いだ後、行儀悪くスプーンを咥えながらリーナは呟いた。

「ああでも、そういうこともあるか……も」

リーナには全く理解できないが、思い当たるようなことがあった。

「ガウエイン大佐もねー、最初はなんか色々言ってたもん。」

本当にこんなこととしていいのかって、すごい確認されたよ」

あんまりしつこく聞いてくるものだから、リーナはいらいらしてしまい問答無用とばかりに身体で黙らせたのだった。一度やってしまえばあとはもうなし崩しってやつだ。

ガウエイン大佐はリーナの上官である。

ヴァル中佐と違い貴族出身できちんと士官学校も卒業しているが、それ以外は共通点が多い。年齢が近く戦歴も似ているので共同で作戦を行うこともよくあった。そのためかお互い同時期に副官を与えられたのだ。

男には男の事情ってもんがある。

据え膳を美味しく頂ける男と、そうでない男。割り切れる男と割り切れない男。残念なことにヴァル中佐とガウエイン大佐はどちらも

後者で、そういう点でも似た者同士であるようだ。

「何それ」

「今更だよね」

そう。彼女たち副官となった女性士官は皆職務内容をしっかりと理解した上で志願している。覚悟などつくの昔に出来ているのだ。リーナもタリヤも自分たちの上官を癒すために容姿、仕草、服装に至るまで念入りに調整している。副官の能力の全ては部隊や作戦のためではなく、上官のためだけに発揮される。磨き上げられた彼女たちを味わうことが出来るのは上官ただひとり。

いつの間にかいつもは会話をするのも一苦労するほど騒がしい下士官たちの食堂は静まり返っていた。食器同士がふれあう音と咀嚼する音が僅かに響くのみ。

しかしそんな異様な雰囲気二人の副官は全く気付かず話を続ける。

「ちゃんと誘った？」

「もちろん！ お好きだって聞いたから黒の下着にしたの。でも……やっぱり裸エプロンの方が良かったのかな？」

「裸エプロンは台所じゃないと魅力半減じゃない？」

「そう思ったから下着に白シャツにしたんだけど、あんまり反応して下さらなくて」

すごくおっきくなつてたなら十分反応しているだろうが！ あと裸エプロンは台所じゃなくても大丈夫です！

兵士たちはさすが中佐、脅威の自制心だと改めて上官への尊敬の念を強くした。同時に無理に自制しなくてもいいのにもものすごく思った、が。

それにしても周囲は顔を真っ赤にして前傾姿勢を取る者ばかりなのに、会話に夢中の彼女たちの目には入らない。

「メイド服とか、スクール水着は？」

一部の兵士たちがとうとう堪え切れずに食事を中断し食堂を飛び出していく。彼らが向かうところは手っ取り早く一人になれるトイレである。下士官以下の兵士は一人部屋を与えられていないからだ。

「ロリ系はお好みじゃないみたいなの」

「あーそつかあ。そうなると難しいね」

むっちり肉感的、という言葉が似合うタリヤ軍曹が好みの中佐はロリ系が好きとは思えない。大人びたその顔立ちにはきつとナース服や女医なんかが似合う、と想像してしまったのはロリ系よりもお姉さま系が好きな兵士たちである。

メイド服が似合うのはリーナ伍長の方だ。あふれんばかりに揺れる胸に黒のお仕着せとエプロン、ニーソックスと絶対領域。

さらに何割かの兵士たちがまた食堂を駆け足で抜けだした。

「リーナは最初どうした？」

「あたしはねー、押し倒しておっぱいで顔挟んだよ」

リーナはふつかふかの自分の胸を下から両手で持ち上げるように揺らして見せた。

確かにそのおっぱいは正義であり凶器です！　ぱふぱふは男のロマンです！　と心の中で悲鳴を上げたのは巨乳派の兵士たちである。

「私おっぱいもないもん……」

悲しい顔でリーナがしたようにタリヤも自分の胸を両手で持ち上げる。その大きさはてのひらに少し余るくらい。

いやいや十分あります！　そして大きさよりも大切なものがあります！　と心の中で突っ込んだのは形を重視する美乳派の兵士たち。そのまま続くおっぱい談義に食堂にいる兵士たちはあっという間に限界へと導かれた。誰か止めてくれ、でももう少し聞いていたい……！

「こんなところで話しても埒があかないわ！　部屋に戻って作戦会議よ！」

「そうね、今日こそ職務を全うしなくっちゃ！」

二人の副官は堂々巡りの論議（胸は小さい方がいいか大きい方がいいか）に唐突に終止符を打つと朝食のプレートを驚異的なスピードで平らげ、あっという間に食堂を後にした。

嵐のような二人の副官がいなくなつて静まり返つた食堂に、誰かの呟きが響いた。

「……もしかして中佐が軍曹を受け入れない限り、これから毎日こんな感じなのか？」

食堂にいるほぼ全員が「中佐早くその気になつちまってください」と祈つたのは言うまでも無い。

その日の訓練における下士官の遅刻率は基地始まって以来のワーストを見事にたたき出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1239t/>

二人の副官

2011年5月9日12時16分発行